



◇ 家の断熱をどのように考えるか ◇

	UA値 (外皮平均熱貫流率) W/(㎡・K)							
	1地域	2地域	3地域	4地域	5地域	6地域	7地域	8地域
	北海道		東北/青森・岩手・秋田	東北/北関東	関東・東海・近畿・中国・四国・九州	南九州		沖縄
H28年省エネ基準	0.46	0.46	0.56	0.75	0.87		-	
ZEH基準	0.40		0.50	0.60		-		
HEAT20 G1	0.34		0.38	0.46	0.48	0.56		-
HEAT20 G2	0.28			0.34		0.46		-
HEAT20 G3	0.20			0.23		0.26		-

上記の表は断熱基準を並べたものです。国が定めている平成28年省エネ基準とZEH基準、そして「その基準では生ぬるい」ということで専門家が集まり設定されたHEAT20の基準を表示したものです。

UA値(外皮平均熱貫流率)は建物の各部位(外壁・窓・天井・床)から逃げる熱損失を合計し、外皮面積で割って求めます(外皮とは、熱的境界になる外壁・床・天井・屋根・窓・ドアなどを指します)。その値が低ければ性能が高いことになります。

国の定めた基準は確かにゆるく感じます。しかし、ドイツ基準を目標にしたG3グレードでは、現実的にはどうなのかという疑問が出てきます。

ファース本部は、30年以上に渡り「断熱性能、気密性能の双方が大切です」と言い続けてきました。

これからはそのバランスを考えることも必要になりそうです。

◇ 家づくりはバランスが大切 ◇

現在、国の定める基準値をギリギリクリアしただけの住宅を「高断熱」として販売しているメーカーやビルダーが大多数を占めています。

一方でUA値を競い、とにかく断熱材を厚くし、気密性も重視した住宅を施工する建築会社が出てきているという極端な状況となっています。もちろん、コスト、デザイン、間取り、土地のロケーションも大切ですが、快適性やランニングコスト、資産価値を考えた時、住宅性能にも、きちんと目を向ける必要があります。

お目当ての住宅会社が普段、建築している家の住宅性能を聞き、他社と比較しながら、実際に建てた方々の声に耳を傾けることも大切です。

また一方で、UA値性能をアピールする住宅販売会社にも注意が必要です。

確かにUA値は、光熱費に大きな影響を与えますが、過度に厚くした断熱材を高い精度で施工できるか、その性能は持続可能か、の確認は必要です。

更に、壁や天井、床などの断熱性能は厚くすることで確保できますが、サッシ(開口部)の断熱性能は、現状ではトリプルガラスが精一杯です。UA値を高めることは、開口部と他の部位との性能差を生みます。その差を生じさせないためにも、バランスが必要です。

お客様から預かった資金を効率良く、家の性能に反映させるためには、断熱性能のUA値と、その性能に見合った高効率の冷暖房機器や空調機器を適切な場所に設置し、正しく使用することが大切になります。

基準値のギリギリではなく、過度のUA値競争にも惑わされず、費用対効果の高いバランスの取れた家づくりを行うべきです。

◇ 建築会社選びもバランスが大切 ◇

温熱性能を考慮する場合は、UA値だけでなく気密性能も重要となります。気密性能が住宅性能に与える影響は、断熱性能よりも高いと言っても過言ではありません。しかし、気密性能をルール化した基準は撤廃されました。気密性能を示す「隙間相当面積係数」(C値)は住宅建築後でなければ測定できません(※C値とは家全体の総隙間を延床面積で割った数値)。つまり、設計段階では、評価できないことが基準撤廃の理由としてあげられます。

基準がないので家を建てる際には、「御社の建てられる住宅の気密性能(C値)は平均でどの程度か」と質問してみるべきです。「0.5以下」と言える建築会社を選ぶことが一つの指標となりそうです。

C値で示される隙間相当面積と言われる数字は、気密測定(測定費用は概ね5万円程度)を行うことで測定が可能です。



ここまでは住宅性能の必要性を記述しましたが、家づくりを依頼する会社には、断熱・気密性能以外の実力も必要です。

要望をしっかりと聞いてくれて思っていた以上のプランやデザインを提案してくれる設計力。現場が綺麗でご近所に配慮ができ、工程や予算管理も安心できる現場力。建てたあとも定期的な訪問があり、安心して家を任せられることができるメンテナンス力。これらの総合力が高い住宅会社を選択し、快適で省エネ、安心して長く住まうことができる家づくりを目指して頂ければ幸いです。

ファース本部では、今後も住宅性能はもちろんトータル的なバランスを考慮し、研鑽を積んで参ります。
 (著:福地 智)